

3 境界パーソナリティ障害のメンタライゼーションに基づく理解

1. 境界パーソナリティ障害 borderline personality disorder (BPD) の発達の起源

われわれのアプローチの土台となっているのは、境界パーソナリティ障害 (BPD) の理解というものは健康な人の発達 normal human development の理解を基にしているという想定である。自己の心的表象の内容に焦点を当てるといふこと——これはほぼ1世紀にわたって心理学的研究の焦点であった（おさらいしたければ Harter 1999 を参照）——よりもむしろ、自己発達について考えると、われわれの関心もいままでとは違って、自己の表象が生じることを可能足らしめている過程、すなわち、「行動主体としての自己」の進化にあることになる。行動主体としての自己（ここでは便宜上、しばしば「行動主体的自己 agentive self」と呼ぶことがある）の発達は、歴史的に無視放置されてきた話題である。というのも、行動主体的自己は自己の精神活動の感覚（「我思う、ゆえに我あり」）から自動的に現出するというデカルト派の想定が支配的であったからである。デカルト派の教義の影響により、内省を通じたこころの状態の意識的な統覚とは、基本的で、直接的で、恐らくあらかじめ備え付けられた心的能力であるという信念が助長されてきた。その結果、(物事の「行為者」や思考の「担い手」のような) 心的行動主体としての自己についての知識は、発達していく能力とか構成された能力であるというよりも生得的に与えられたものであるという確信へと至った。われわれが、心的行動主体としての自己についての獲得した知識を、ある特定の状況では上手く行かないこともありうるような発達過程の結果であると理解するならば、BPD の起源について新しい視座を得ることができる。この新しい視座を手に入れるため、われわれが最

初にやらなければならないこととは、われわれの最早期の日々について、そこへ立ち返って考えることであり、すなわち個人の早期の愛着関係という文脈で自己発達を振り返ることである。

2. 愛着理論という視座の妥当性

かつては、愛着理論を用いて BPD の症候学に光を当てようという試みが数多くあった。養育者との早期の経験がその後の愛着関係を組織化するのに役立つという Bowlby (1973) の提案が、陰に陽に、BPD の精神病理学を説明するのに用いられてきた。たとえば、対人攻撃や無視放置、見捨ての脅しといった BPD 患者の過去の経験が、現在の関係を攻撃や無視放置として知覚する原因となっているといわれてきた (Benjamin 1993)。BPD 患者には特に、「親密さに抱く不安／怒りという情緒の鑄型」(Dutton et al. 1994b) を反映している、おびえ - とらわれ型の愛着スタイルという特徴があると示唆する者もいる。BPD 患者の成人愛着インタビュー adult attachment interview (AAI) での語りを研究すると、もっともしばしば当てはまる分類は、とらわれ型の区分け (Fonagy et al. 1996) であり、この中でも、混乱 - おびえ - 圧倒という下位分類がもっとも一般的にみられる (Patrick et al. 1994)。愛着と境界例の病理論とをつなげようとする過去の試みが強調してきたのは、「注意や援助を求める嘆願や要請、およびしがみつきの行動によって接触するように合図をすることで、近い間柄であることを確認すること」(Gunderson 1996) が、両価型愛着／とらわれ型のグループと境界性グループとに共通してよくみられる特徴であるということである。BPD 患者はまた、外傷体験や虐待体験に関して、こころの整理がついていないままになっているという傾向もある (Patrick et al. 1994; Fonagy et al. 1996)。

BPD 患者が自らの愛着を不安定であると感じていることは疑いようがない。しかし、幼少期からの、あるいは成人してからの不安定型愛着について記述してみても、その説明は幾つかの理由で臨床的に不適切である。(1) 不安を孕んだ愛着は非常にありふれたものである。どういうことかといえば、労働者階級を標本とすると子どもらの大多数が示すのは不安を孕んだ愛着なのである (Broussard 1995)。(2) 幼少期における愛着の不安を孕んだパターンは、成人期の相対的に安定した戦略に対応する (Main et al. 1985)。しかるに、BPD

患者の混乱した愛着の顕著な特徴は、安定性を欠くことである (Higgitt and Fonagy 1992)。(3) 非行者と BPD 患者との双方は、状況や関係性のタイプのいたるところにバリエーションがある。たとえば、青年期の非行者は、非行仲間内の他者の精神状態に自覚的であり、BPD 患者はときに、精神保健の専門家や家族メンバーの情緒状態に過敏である。(4) BPD 患者の臨床所見にしばしばみられるのが、患者自身や他者の体への激しい攻撃である。おそらくそのような暴力傾向には、そうした患者をしてこころというよりも体で反応しやすくする付加的構成要素が含まれているにちがいない。個人の早期の愛着関係と後の BPD 症状の発現との関係について適切に説明するためには、個人が環境を経験する際の仕方を考慮に入れ、デカルト派において、歴史的に、何ら問題のない規定の事実とみなされてきたまさにそうした環境を経験するという事実こそが、発達上の諸要素によって決定された達成であるとみなすことが必要である。

3. 安定型愛着の文脈での最適な自己発達

著名なダーウィン研究者である、John Bowlby (1991) は、分離に対する乳児の抗議が明らかに選択上の利点を有していること——すなわち破壊からの保護——に強い印象を受けた (Bowlby 1969)。個体発生的にも系統発生的にも、乳児期が危険性の高い期間であると考えれば、自然選択が愛着形成能力のある個体を好むのは議論の余地がない。親しい間柄を築き維持するのに役立つ愛着行動の構成要素として広く認められているものには次のものがある。(1) 養育者を子どもへと引き付ける信号 (たとえば、微笑むこと)、(2) 同じ機能を果たす (泣くことのような) 嫌悪行動、そして (3) 子どもを養育者の下へともたらす骨格筋活動 (原初的移動運動) である。しかし、第 4 の構成要素があって、それにより、身体的保護の問題を越えた、人類の愛着の全活動を根本的に理由付けるようなより進化した論拠が与えられる。Bowlby によれば、おおよそ 3 歳で、目標修正型のパートナーシップを意味する行動が新生し始める。目標修正型のパートナーシップを仲立ちするために中心となる心理的過程は、内的作業モデル internal working models (IWMs) である。

Bowlby のそもそもの概念は、愛着研究の分野における何人かの優れた人たちによって、さらに精緻化されてきている (Main et al. 1985; Crittenden

1990, 1994; Sroufe 1990, 1996; Bretherton 1991; Main 1991; Bretherton and Munholland 1999)。そして、ここで気をつけるべきは、単なる物真似にならないことであろう。しかしながら、これらの再定式化に含蓄された4つの表象システムを要約することは有用である：(1) 早期の養育者がもつ相互交流的な特性に対する期待（それは生後1年以内に創り出され、その後も精緻化されていく）、(2) 出来事表象（それによって、愛着に関連した経験の一般的記憶や特殊な記憶がコード化されたり、想起されたりする）、(3) 自伝的記憶（それによって、特有の出来事が概念的に結びつけられる。なぜならば、それらの出来事は継続中の私的物語や発展中の自己理解と関連するからである）、(4) 他者の心理的諸特徴を理解すること（すなわち、欲望・情緒といった原因となるような動機的精神状態や意図・信念といった認識的精神状態について推測し、それらが何によるかを考えることである）、およびこれらの諸特徴を自己の諸特徴と区別すること。それゆえに、IWMの鍵となる発達上の到達は、それまでの相互作用の歴史において繰り返し起きている不変のパターンから推測された欲望、情緒、意図、そして信念といった、安定的で一般化された一連の志向的特性という点から自己（および重要な他者）を処理するシステムを創造することである。子どもは、一定の状況から推測された局所的で、より一時的な志向的状态と連動させて、自己や他者の行動を予測するために、この表象システムを用いることができるようになる。

古典的には、愛着理論において、行動から表象へのこの相変化は、認知の発達によって推進される愛着システムの改変とみなされてきた（Marvin and Britter 1999）。ここで、われわれの主張はあべこべになるであろう。われわれが提案するのは、愛着が人類にもたらしたとびきりの利点は、愛着が社会的知性や意味形成の発達を促進する機会であったということである。すなわち、愛着もまた認知の発達を推進するのである。「解釈」能力は、Bogdan (1997) が「これが生物学的に重要となるような文脈でお互いを理解する有機的組織体」(p.10)と定義したのだが、それは、他者が「経験や情報や感情を心理的に共有すること」(p.94)に関る際に、まさに人間らしいものとなる。人の行動を解釈する——お互いを理解する——能力には、志向姿勢、すなわち「自分がその行動を予測したいと思う対象を、信念や欲望をもつ合理的行動主体として取り扱うこと」(Dennet 1987, p.15)が必要である。

心理学的な観点での解釈能力——これを対人解釈機能 interpersonal interpretive function (IIF) と呼ぶことにしよう——は、愛着体験の単なる発生器

や橋渡し役ではない。すなわち、われわれが主張しているのは、それはまた、乳幼児期の他の人間、つまり愛着人物との緊密な近接により引き起こされた複雑な心理的過程の産物でもあるということである。IIF を Bowlby の IWM と同一に扱うべきではない。すなわち、それは経験の表象を含んでおらず、養育者との個人的な出会いの貯蔵庫ではないのである。むしろ、それは新しい経験を処理する手段である。情緒調節、注意機制の構築、そしてメンタライズする能力の発達を、個人が他者と生産的に協働作業ができるようになるため一緒になって作用している、対人解釈機能の構成要素というように単一の標題で考えることは役に立つかもしれない。この機能を働かせることができるためには、個人には精神状態の象徴表象システムが必要であり、特定の意図に沿ってこころの状態を選択的に活性化させることができること（注意の制御）も必要である。乳児期の他の人間との緊密な近接は、これらの能力の発達のためには不可欠な条件とみられている。その結果として、早期の感情的きずなの崩壊が不適応的な愛着パターンを築くだけでなく、健康な社会発達に不可欠な一連の能力を蝕むことにもなる。われわれが示唆するのは、BPD は、情緒調節や注意の制御、メンタライゼーションといったもの——これらは皆、通常、愛着関係の文脈で獲得される——の能力の欠如や損傷といった観点から理解しようということである。これらの自己調節能力の頂点に位置するメンタライゼーションには、志向的精神状態——たとえば欲望や感情、信念——に基づいて自分や他者の行為を理解することが必要になる。メンタライゼーションには、こころの中でのことはこころの中でのことであるという認識が必要である。それは自分自身や他者の精神状態を精神状態として認識するということを反映している。実際、メンタライゼーションが言及しているのは、黙示的にも明示的にも、こころの状態や精神的過程の観点から、お互いのこと、そして自分のことを理解するということである。もちろんわれわれは、われわれが精神病理だと解しているような一見異常な行動に見えるものを理解しようと努力するとき、そして、その精神病理を改善することを意図した精神療法的会話を主導するときに、精神力動的臨床家として、絶えずメンタライズしている。それゆえに、メンタライゼーションの能力が制限されており、他者を心的実在として理解する能力を用いることができず、他者や自分の精神状態についての混乱して紛らわしい不正確な表象を作り出している個人を理解しようとするのは、われわれにとって特段にやりがいのある作業となるのである。いずれ分かるであろうが、そのような患者は外傷に直面すると特有の脆弱さを呈する。